

# イタリアのサッカースタジアム見聞記 (1993年)

梶原 健一

はじめに

日本は空前のサッカーブームに沸いている。1993年5月に開幕したJリーグはどのカードも満員となり、テレビの視聴率も他のスポーツ番組を凌ぐ勢いである。しかし日本でのサッカー人気は本物であろうか？ 世界的に最も競技人口の多いスポーツと言われるサッカーも、本物のプレーと本格的な施設、そして熱心な観客たちが一体となった盛り上がりがないければ、日本での定着はおぼつかないであろう。日本にはFIFA（国際サッカー連盟）の規定を満足する競技場が存在していない。日本はまだまだサッカー後進国だといえる。そんな日本が2002年のワールドカップ誘致に向けて本格的に動き出している。



このレポートは筆者が直接訪問したイタリアのサッカー競技場に関する報告である。イタリアでは1934年に次いで1990年にもワールドカップが開催された。そして3回の優勝経験を持ついわばサッカー先進国の一つである。イタリア国内の12ヶ所のスタジアムはいずれも大きな規模と素晴らしいデザインを誇るもので、構造デザインについて独創的な工夫が随所に見られる。今回はサッカースタジアムの概要について述べ、次回以降でローマ、ミラノ、トリノ、ジェノヴァのスタジアムについて報告する。

## 1. ワールドカップのスタジアム

### サッカーという「大衆文化」

サッカーはいたってルールが簡単であるが、激しい運動で見ている人の興奮をも呼び起こすスポーツである。イタリア語では「CALCIO (カルチョ)」と言って、サッカー(籤)賭博のことをトトカルチョという。イタリアではこのトトカルチョの人气が高く、誰でもBARで賭けることができる。

今年(1993年)の5月、ミラノに着いたとき市内のレストランはがら空きの状態だった。ちょうどその晩、ACミランとフランスのマルセーユの決勝試合がミュンヘンであつたらしく、ミラン子は自宅でテレビを見ていたという。しかし試合が終わった頃は、負けた腹いせにクラクションを鳴らして暴走する何台もの車に出くわした。「これがもし勝っていたなら、それはすごい騒ぎになっていましたよ」と、現地の人は言っていた。みずからの感情をはずかしげもなくさらけ出すラテン系のイタリアでは、サッカーが一種の「文化」として定着しているのである。



### サッカーとスタジアムの起源

サッカーの起源ははっきりしないが、イングランドではすでに14世紀から記録として残っているし、イタリアでは17世紀後期までには極めて「貴族的」で鍛錬に役立つ娯楽の域にまで高められていたという。いずれにせよ球技として最古の歴史を誇るものに違いない。そのサッカーが世界的に今日の隆盛を見るようになるのは、他でもないワールドカップのおかげである。

ワールドカップとは一般にサッカーの世界選手権を指す。1904年、パリに国際サッカー連盟(FIFA)が生まれ、1930年以来4年に一度の割でワールドカップが開催されている。オリンピックと異なるのは、ワールドカップは「都市」でなく「国」を舞台に試合が行われることである。そしてその予選は世界中で行われ、決勝大会の主催国は国の威信を賭けて成功させようと努力をする。1994年はアメリカ、1998年はフランスで開かれることが決まっており、日本はその次の大会の主催国として立候補している。ワールドカップの産みの親はジュール・リメというフランス人である。彼の回想録は激動の世界史ともいべきもので、サッカーファンならずとも興味深いものだ。そしてリメの活動は、世界中にすばらしいサッカー競技場を建設する動きをも作ってきた。

スタジアムの起源は古代ギリシャにあり、ローマ時代のコロッセオ(BC80年)が現代スタジアムの原形といわれている。すなわち楕円形のアリーナと、これを取り囲んで連続する観客席がスタジアムの基本となっている。2000年以上経った今も、この形はほぼ守られているのである。

### スタジアムの要素

現代はスタジアムでさまざまなスポーツイベントが開催される。ではスタジアムの基本要素とは一体何であるかを考えてみよう。

先ず第一にフィールド（アリーナ）がある。ワールドカップでは68×105mのラインに囲まれたフィールドが規定され、陸上競技では400mトラックが基本になっている。そしてフィールドには天然芝が敷かれる。選手がその技を存分に発揮でき、いつでも使用できるアリーナが先ず必要である。

第二には観客席である。5～10万人を収容し、人々の興奮と熱狂を増す観客席がよいスタジアムの必須条件である。そのためには、すりばち状で声や音がこもるような形が望ましい。しかし興奮した観客の暴力や、災害時の避難にも留意した構造でなければならない。

第三には観客席を覆う屋根である。フィールドには、太陽の光と時によっては雨が降り注いでいても、観客は強い日射やうっとうしい雨から守られ、心地よい風が吹き抜ける。そんな屋根が必要である。ここにはセンスのよいデザインと空間構造の技術が要求され、建築形態を決定づける要素でもある。



このようにスタジアムには建築の多くの要素を含んだ魅力が存在している。そして1990年のワールドカップが開催されたイタリアの12ヶ所のスタジアムこそは、世界のスタジアムの見本とさえ言われるほど素晴らしいものである。

今の日本の建築界は「ドームブーム」に沸いている。エアードームから始まって、開閉ドーム、ケーブルドーム、そして木造ドームとドーム構造の開発競争はとどまるところを知らない。忙しい日本人にとってスケジュールどおりのイベント開催が不可欠だし、スポーツ以外のお祭騒ぎも大好きだから、ドームは我々の要求を満たすうってつけの施設なのである。ゆとりの時代、地方の活性化と言われ出して久しいが、日本のドームブームはその顕著な現れと見ることができる。しかし本当の豊かさとは一体何なのだろう？ 本格的なスタジアム建築がはたして日本に生まれるのだろうか？ この連載では、このような日本の状況の中で、イタリアという国のスタジアムを通して、本来のゆとりあるスポーツ施設について考えてゆきたい。

#### 参考文献

1. S.Pietro "1990 STADI IN ITALIA" EDIZIONI L'ARCHIVOLTO, MILAN, 1990
2. S.Inglis "The Football Grounds of Europe", WILLOW BOOKS, LONDON, 1990

(1993年12月)

## 2. ローマ・オリンピックスタジアム

### ローマ・スタジアムの概要

テヴェレ川沿いの緑深いスポーツ公園内に、大きなローマ・オリンピックスタジアムが建っている。川と小高い山にはさまれた絶好のロケーションである。ここはサンピエトロ寺院の北方約3.5 kmの位置にあたり、市の中心部から程遠くない所で、交通の便も良い。



このスタジアムは、元々1930年代に原型が作られたものであるが、1950年代にローマオリンピック (1960年) のために54,000人収容のスタジアムに建て替えられた。さらに近年になって、1990年ワールドカップや将来の大きなスポーツイベントに備えるため、スタンドの増設や屋根の新設など大々的な改築が行われた結果、87,500人収容の大スタジアムに生まれ変わったものである。このスタジアムには美しい芝と広いスタンド、そしてユニークな屋根といったスタジアムが具備すべき基本要素が整っている。

### フィールドと観客スタンド

このスタジアムに来て先ず印象に残ったのは、芝の美しさである。年間約60回のサッカーゲームを消化するが、芝の損傷は見受けられず、よく維持管理されている。

さらに一層構成の大きな観客スタンドに圧倒される。広々としていて開放的な感じであるが、陸上トラックをはさんでサッカーを見るにはやや視線が離れているような気がした。それでも



1980年代の改造時には、かなりそのことを意識してスタンドの増設を行ったらしい。おそらく美しい公園内の景観を損なわないために、一層のすり鉢型スタンドを選んだのであろう。

### ヨーロッパ最大の屋根構造

このスタジアムにおける最大の特徴は、観客スタンドを覆うユニークな屋根構造である。長径314m、短径220mというとてつもなく大きな楕円形のスタジアムの外周に、わずか12本の鋼管柱と4本のRC柱で支えられた三角形の鋼管トラスリングが巡らされている。内周は12本のケーブル(87mmφ)がテンションリングを構成し、外リングと内リングは放射状のケーブルトラスで連結されている。屋根は透光性のあるテフロン膜である。これほど大きい屋根でも剛性が高く、一次固有周期は約2秒に抑えられている。



設計者のマジョヴェッキはこの構造形式を「複合張力構造システム」と名付け、楕円面を美しく構成する事に成功したという。このシステムの特徴は自己完結型の構造体で、既存のスタジアムにも設置が可能なことである。ローマのそれはヨーロッパ最大の規模を誇っている。1993年世界陸上選手権が開催されたシュテュツガルトのスタジアムも同じようなシステムであるが、ローマより規模は少し小さい。この場合は外周部が上下にうねっていてデザイン的にはさらに凝っている。

この複合張力構造システムは、軽快で躍動感のある屋根を作り出すことのできる、非常に魅力的な構造形態である。1988年に竣工したシドニーのフットボールスタジアムも同じような形態をしていて、近年のスタジアム建築の一つの流行と言えるかも知れない。ローマ・オリンピックスタジアムは、鉄骨とケーブルと膜を自在に組み合わせて、開放的なスポーツ空間を作り出すことの良い見本である。

#### 参考文献

1. M.Majowiecki "The New Suspended Roof for the Olympic Stadium in Roma", IASS, Copenhagen, 1991
2. R.Bergermann,K.Goppert:"The new Cable-Membrane Structure for the Neckarstadion Roof in Stuttgart", Guildford, Surrey, 1993

(1994年1月)

### 3. ジョゼッペ・メアッツアスタジアム（ミラノ）

#### スポーツシティ

ミラノの北西部に位置するサン・シーロ地区はヨーロッパ最大級のスポーツコンプレックスを形成している。先ず1888年の競馬場に始まり、各種のスポーツ施設が次々に建設され、1930年に現在の施設群の原形が完成された。その後も各施設は拡張され続けている。メトロ1号線に乗って、Lotto駅で降りるなど簡単に行けるので、アクセスは申し分ない地区である。このサン・シーロ地区はスポーツシティとも呼ばれていて、ミラノが自慢する地区の一つである。



このサン・シーロ地区の中での代表的な施設がサッカー専用競技場、ジョゼッペ・メアッツアスタジアムである。このスタジアムはいわゆるイギリス型—四角形—をしているが、その原形は1925年に建設された。その後、1950年代にコーナー部と2階のスタンドが増設され、現在の85,000人収容スタジアムになったのは、1990年のワールドカップ開催時であった。この時は2階スタンドから連続する形で3辺のスタンドが増設され、新たに屋根が設けられたのである。このように大がかりな改造を加えて、築後70年近く経った現在も健在のスタジアムは世界的にめずらしいものである。

#### サッカー専用スタジアム

ジョゼッペ・メアッツアスタジアムの最大の特徴は、ユニークな外観である。斜路を外周に張り巡らせたファサードは、1956年の増設時に形成されたもので、大勢の観客のアクセスと退出路を効果的に確保している。近年の拡張時は、構造的に独立した形で3階スタンドを増設した。つまり11箇所の円筒形のRC造柱（階段やエレベーターを内蔵）によって増設スタンドを支え、その内4箇所のコーナー部の柱は屋根の支柱にもなっている。これらの柱も斜路（勾配7%）のデザインモチーフを用いて、デザイン的に統一が図られている。

観客スタンド全面を覆う屋根は、アルミフレームとボルト状のポリカーボネートである。そしてこれを吊っているのがスパン205m×150mの鉄骨トラスだ。このトラスは9.5mの成でフィーレンディール形式になっていた。主ガーダーは2列のダブルトラスとし、これにサブガーダーが約40mピッチに剛接合されていて、屋根架構全体が中央に開口を持つスペースフレームのような形状をしている。

フィールドの天然芝は「セルシステム」の他、凍結防止のため地盤のヒーティング装置も設けられている。



### サッカースタジアムの運営

サッカーの魅力は何といてもそのインターナショナル性であろう。ワールドカップをめざす国は140ヶ国以上にのぼるといふから、世界中のほとんどの国が参加しているのである。さらに多くの国では国内のいろんなクラブチームのリーグ戦で勝敗を争っているから、世界のサッカー人口はとも数え切れないほど多い。イタリアでは「セリエA」が最高のサッカーリーグであり、その中で最強のチームがACミランといわれている。

ジョゼッペ・メアッツァスタジアムをフランチャイズとしているのは、そのACミランとインテルナチオナーレの2チームである。このスタジアムではセリエAの試合の他ヨーロッパ選手権などを合せて、年間約60回ほど使用されている。天然芝の使用回数としては限界に近い。そして観客席の多くは年間契約であり、人気のACミランの場合は78,000席が契約席で、残りのわずか7,000席がチケット販売席なのである。スタジアムの運営はミラノ市が行っているが、グラウンドキープとスタンドの清掃は民間に委託している。その経費は芝の傷み具合によって異なるが、年間平均10億リラにのぼるといふ。ミラノでは年間60日のサッカーのために相当の経費を使っている。

(1994年2月)

## 4. ルイジ・フェラーリス (ジェノヴァ)

### 都心型スタジアム

ジェノヴァは中世に港町として栄えた古い都市で、地中海に面した街のすぐ後ろには山が迫っており、美しい町並みを形成している。現在は市域が港から山手の方にも拡大し、ジェノヴァの中心をなす Bisagno川沿いのMarassi地区に、サッカー専用スタジアムであるルイジ・フェラーリスがある。

ジェノヴァをフランチャイズとするのは、GenoaとSampdoriaの2チームである。このSampdoriaには、ワールドカップにそれぞれオランダとイングランドから代表選手として出場する2人のスーパースターがいて、国際都市らしいチームである。



ルイジ・フェラーリスの特徴はサッカー競技場を含む大規模な市街地ビルとして建設されたことで、用途や形態的にも他の競技場とはずいぶん異なっている。方形をなす市街地の区画にすっぽりとおさまる形につくられ、スタンドの下にあたる1階には、ショッピングアーケードや地域住民専用の体育館が設置されている。これらはスタジアムの入り口とは別になっており、サッカーの試合とは関係なしに市域全体及びMarassi地区の住民へのサービスが行われている。スタジアムへのアクセスは、市街地らしく歩行者中心に考えられていて、必要最小限の駐車場しか設けられていない。

### イギリス型スタジアム

ルイジ・フェラーリスはサッカー専用スタジアムということと、市街地の区画に合わせてプランが決定されているので、必然的にその形状はスタンドが四方のエリアに分かれた「イギリス型」のスタジアムとなる。この形状はサッカーの観戦にとってきわめて都合がよく、観客の視線がフィールドに近くて見やすい長所がある。





そして興奮した観客相互のトラブルを防ぐよう動線を分離することができる。

フィールドは、芝生の保護のためにサッカー以外には用いられず、年間の使用日数が限られている。ここでも天然芝の管理に「セルシステム」が採用されている。これは芝の根への浸透水と、排水そして凍結防止のための加熱の機能を合わせもつシステムである。

### 斜張橋の屋根構造

このスタジアムを特徴づける形態は、4つのコーナータワーとオレンジ色の巨大な外壁である。そんな重い感じのファサードと好対照をなすように、屋根は軽快な三角形トラスを用いて、斜張橋のイメージで設計されている。

メインガーダーは4隅のタワーを結び、それぞれ140mと73.5mのスパンを成3mの鉄骨トラス（355φ～76φの鋼管）で渡している。それを吊るステイは、一辺1.5mの三角形トラスである。このステイは引張りに効くだけでない。Bisagno溪谷特有の風によって、屋根が受ける吹き上げ力に対して、圧縮剛性を持たせてある。そしてステイはRCタワー頂部に水平方向にルーズ固定され、温度変化に対応している。



### 大規模スタジアムのゆくえ

ルイジ・フェラーリスは都心に立地するが故に、1920年代に建てられて以来常に市街地改造の波にさらされてきた。1990年ワールドカップのために改造を迫られたこのスタジアムの基本コンセプトは、「変化に対して柔軟な対応が可能」であるということだった。「ここでは単一機能のスタジアムという伝統的な考え方は捨てられている。スタジアムはもはや、Structural Machineとか一つのスポーツテクノロジーのもとに建設されるべきではない、スタジアムは都市の生活で重要な役割を果たすべく、周辺と調和した施設として考えねばならない」というのがジェノヴァのコンセプトである。

（1994年3月）

## 5. デレ・アルピ（トリノ）

### イタリアで最も美しいスタジアム

ミラノの西方、バスで約2時間の所にトリノがある。ここはフランスとスイスからのアルプス大街道の会合町で、ピエモンテ州の州都になっている。トリノにはイタリアきっての名門、サヴィア家の本家があって、1861年から1946年までイタリア王の都となった。トリノはまた機械工業、特に自動車産業の本場でもあり、フィアットやランチアが生まれた所である。このトリノ市街地から西北の郊外に、イタリアで最も美しいといわれるスタジアム、デレ・アルピが建っている。



トリノには以前から2つのスタジアムがあったが、1990年ワールドカップのためにこの新しいスタジアムが建設された。イタリアのワールドカップスタジアムの内で新設されたのは、バリとトリノの2ヶ所だけである。

トリノ新スタジアムはまたイタリアで初めての民間企業運営スタジアムである。ここをフランチャイズとするサッカーチームは、セリエAの強豪ユベントスとトリノカルチオの2チームである。ユベントスはACミランの最大のライバルと目されて、70,000人収容のスタジアムを常に満員にしている。このスタジアムは1986年に行われたコンペで選ばれたもので、現代構造技術の集大成ともいえる素晴らしいスタジアムである。

### ディテール豊かな鉄骨造スタンド

デレ・アルピは半地下式の構造になっている。つまりスタジアムの周辺を人工の丘が取り囲み、エントランスがGL+8m、フィールド面がGL-10mである。スタンドは3段構成で、地下にあたる1,2階はRC造であるが、地上部の3階は鉄骨造になっている。

このスタンドは段床部分がプレキャストコンクリート版で、それを支える構造体が



屋根まで伸びるマストと共に、鋼管でトラスを形成している。トラスの接合部はすべてピン構造で（写真参照）、鉄骨構造の教科書にあるような見事なディテールであった。大体ヨーロッパでは、鉄骨のディテールに凝った建造物が多いが、ここトリノは特に自動車産業に代表される機械工業が発達しているので、このような繊細なデザインが可能なのであろう。

### テンション構造の屋根

このスタジアムの最大の特徴は、テンション構造の屋根である。屋根材は断熱材を組み込んだアルミの折板で、南北面の一部のみテフロン膜のケーブルネット構造になっている。これらの屋根は、鉄骨のマストで支えられたケーブルから吊られていて、全体として一つの空間構造を形成している。



構造システムとしては、ローマのオリンピックスタジアムと同じであるが、マストを外側のステイケーブルで安定させることで、外周のコンプレッションリングを無くし、デザイン的な面白さと鉄骨量の低減を図っている。傾いたマストは少しずつ高さが異なり、あたかもアルプス山脈のごとく見えることから、このスタジアムは「デレ・アルピ」（「アルプスのような」という意味）と呼ばれる。

内側のテンションリングは、径84mmのケーブル6本で構成しており、楕円面の中間部で2組のタイケーブルによってつながれている。このことでテンションリングの曲率が小さくなり、緊張力も小さくする事が可能になっている。

このスタジアムはサッカーをやっていないなくても、見ていて飽きることがないほど建築として魅力がある。「イタリアの富の三分之一を所有する」といわれる大富豪、ジャンニ・アニェリがパトロンを務めるユベントスのフランチャイズ、デレ・アルピ。このようなスタジアムが日本に生まれるのは果たしていつのことだろうか。

（1994年4月）

## 6. スタジアムの条件

### サッカーの魅力

サッカーが近代スポーツとして確立したのは、1863年にロンドンで蹴球協会（F A）が設立された時に始まる。その後プロを禁止したラグビー派はイングランド北部で発展し、オーストラリアでも独自のルールを作り、アメリカに渡ってはアメリカンフットボールとして定着した。一方のサッカー派は1885年にプロを認めて、統一ルールができた。もともとイギリスのパブリックスクールで行われていた競技を組織化したところに成立したサッカーは、イギリスではフットボールと呼ばれるが、正式にはassociation footballという。サッカーの語源はassociation の口語短縮形である。



そんなサッカーは20世紀に入って民衆のスポーツとして世界中に広まった。ビクトリア朝時代の大英帝国が世界に向かってサッカーを携えて出かけたのである。現在世界のサッカー人口は2億人といわれる。1990年のワールドカップの観客数は250万人、テレビ中継を見た人は延べ267億人という。

「20世紀の人類に最も愛されたスポーツ」、何がそんなに人をひきつけるのか。

サッカーは球技としてきわめて簡単なルールで行われる。しかし、そのゲームにはスポーツのすべてがある。サッカーの王様といわれたベレがその著書でサッカーの魅力をこう語っている。「サッカーこそゲームの中のゲームなのだ。スピード、体力、技術、理性、反射神経、チームプレイ、判断力、協調性、バランス、決断力、さらには力をもテストする」。「サッカーってのは、世界の総人口の60%にとって人生でいちばん大切なものなんだ。サッカーをめぐって殺しあいが起きるほどだ」。「サッカーはコンピューターでプレーするわけでない。人間が広いフィールドの上でプレーする。一つの試合で、たとえ短いシリーズでもどんなことだって起こり得る。番狂わせも珍しいことじゃない」。

### サッカービジネス

20世紀を特徴づけるものの一つとして、スポーツの大衆化と国際化が挙げられる。そして近代オリンピックとサッカーこそはその代表である。特に近年は交通やメディアの発達に伴って、ビジネスとして定着した感がある。1964年東京オリンピックが、新幹線と高速道路とカラーテレビを日本中に普及

させ、1984年のロサンゼルスオリンピックはコマーシャルイズムをうまく利用してスポーツビジネスの重要性をわれわれに教えてくれた。

スポーツビジネスといえばアメリカがその本場といわれるが、アメリカでは何事をもビジネスとしてしまうところがある。そこにはショービジネスの感覚が働いていて、広告や話題作りを通じて「集客力」を最大限に発揮する手法が常に真剣に検討されている。

1993年に始まった日本のJリーグは、これらの20世紀後半の世界的な傾向に乗って、それまで日本で人気のなかったサッカーをうまくビジネスとして成功させたものといえる。しかしまだ始まったばかりである。日本にはイタリアのような自慢できるサッカースタジアムがまだ無い。ボランティアに支えられたジュニアサッカーこそ多くなってきたが、街角の広場でボールを蹴る少年たちはまだ少ない。スポーツを文化と認める土壌が日本に根付いた時、その時こそ本当のスタジアムが日本に生まれるのだろう。

## 世界の舞台

ワールドカップでは世界のサッカーが見られる。世界のスーパースターとそれぞれの国民性が同時に見られる。

ペレ（ブラジル）が、エウゼビオ（ポルトガル）が、ベッケンバウアー（ドイツ）が、クライフ（オランダ）が、プラティニ（フランス）が、そしてマラドーナ（アルゼンチン）が芝の上を駆け抜けた。

再びペレの言葉に耳を傾けよう。「アメリカは気が狂ったみたいにめっちゃめっちゃに走り回って、選手一人一人は決勝ゴールを決めるヒーローになりたい。ブラジルは合唱体みたいに並んで短くて速いパスを出す。イングランドは景気のいい長いパスをだす。これは英国の気候のせいで、グラウンドがぬかるんでいるせいだ。アルゼンチンは南米の大草原の gaucho を思わせる体当たり、オランダは融通性に富んだゲームを展開する。ドイツは見事に組織されたチームで、時にはあつといわせる。ロシアは敵がエネルギーを消耗するのを待つて否応なしに得点する。イタリアはオールスター選手の寄り集まりだが、とことん守備中心である。」

さらにアジアやアフリカの諸国も特徴ある競技を見せてくれる。1990年のカメルーンの活躍を記憶している人も多いのではないかと思う。ワールドカップは人種差別や経済力、軍事力を越えた所で行われる世界の舞台である。

## テクノロジーの役割

そんなすばらしい世界の舞台にふさわしいスタジアムが我が国に求められている。そのための条件とテクノロジーの果たすべき役割を最後に考えてみよう。

スタジアムの基本要素とは、フィールドと観客席と屋根である。各競技場の解説でも再三そのことについて見てきた。これらの基本要素がうまく絡み合っ一つ一つのコンセプトのもとに統合され、さらに次のような条件が満足された時、理想的なスタジアムが誕生するのであろう。

- 1) 選手にとって存分にプレーできること。これはフィールドはもちろんのこと、選手の控え室やバックスペースすべてについてである。
- 2) 観客が楽しめること。つまり快適であつてかつ安全であることが条件である。2年前に満員の観客席が倒壊したこと（新聞記事参照）は記憶に新しいし、暴徒と化したフーリガンによる1985年の事故など教訓である。
- 3) 報道により世界中で楽しめること。つまりサッカービジネスを支えるシステムが用意されていないなければならない。

4) サッカー専用スタジアムであること。すなわち多目的ホールがかえって使いにくく、無目的ホールになってしまうといった愚は避けるべきである。

これらの条件はFFAのスタジアム建設指針として具体的な規定があるが、現代の技術でどう応えるかは建設する側の問題である。われわれはコストさえ厭わなければ、すでに何でもかなえられるハード技術を有している。しかしさまざまな要素技術を巧みに統合するソフトの技術はまだ未熟である。都市のシステムに融合したスタジアム、ショービジネスのスムーズな運営を可能とするスタジアム、そのライフサイクルを通してエネルギー消費を最小とする環境技術、人に喜びを与える空間構造技術など研究課題はまだまだある。

参考文献

1. F.P.マゲンJr.「フットボールの社会史」、岩波新書、1985.8
2. ベレ「ワールドカップ殺人事件」、創元推理文庫、1990.7

(1994年5月)

おわり